

権不十年

*Kenpu
Junen*

細川護熙

*Hosokawa
Moribiro*

権不十年

発行日 ——— 1992年 1 月30日 第 1 刷発行
1992年 2 月25日 第 6 刷発行

〈検印廃止〉

著者 ——— 細川護熙

発行 ——— 日本放送出版協会
〒150 東京都渋谷区宇田川町41-1

振替 ——— 東京1-49701

印刷 ——— 啓文堂

製本 ——— 石毛製本

ISBN4-14-008803-6 C0030

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

©Morihiro Hosokawa
1992 Printed in Japan

権不十年

Kenpu Junen

目次

第

1

章

野草に聴かせる歌 7

人生の最高の楽しみ 8

阿蘇の四季彩 10

ブレイン・フアーマー 13

軽井沢山荘 14

山桜への思い入れ 17

二時間の別世界 19

第

2

章

古聖人の道から 23

一流の人と会え 24

「論語」の素読 27

文武両道 31

学問とは 33

フンドシ先生 34

稚子太子像 38

八百よろずの神 40

学ぶということ 43

読み書きそろばん 44

塾方式のすすめ 46

街は大学から 48

画期的な江戸時代の教育システム 50

ジェントルマンのための教育 52

義務教育の意味 54

文部省の役割は 57

免罪符 60

後期後期博士課程 61

地金を磨くこと 63

たしなみの力 64

幻想即興曲 69

五分の時間 72

パーティーの花飾り 75

徒党を組むことについて 77

第

5

章

そこで翔べ・地方人 87

知性とウィット 78
 青年とは 81
 無私ということ 83

徒弟制度 88

現場主義 91

恐怖のワンパターン 94

つり合いの感覚 96

若者のビヘイビア 97

小錦のトイレ 99

ガバナビリティ 101

百のターゲット 105

日本一づくり運動 107

燃える十五% 111

第

6

章

豊かさとは何か 115

「パパラギ」 116

文化と効率 143

くらしの視点から 118

お年寄りの原宿 120

二〇〇〇年には東京はパンク 123

限定的な首都機能移転 125

東京問題は文化の問題 128

地域活性化の基本方策 129

諸悪の根源、補助金 132

“開放区” 134

自治体のサイズ 136

大きくしながら小さくする 139

二十世紀のモニュメント 144

残せるものは文化 147

アートポリス 149

文化と効率 152

文化のツケ 155

文化大国日本を目指して 157

武家政治の流儀 159

花に十日の紅なし 160

君子なくんば 161

紅茶とコーヒー 164

リーダーの五つの条件 168

シテイ・マネージャー 171

議員は名誉職 173

第五共和制 175

大人の知恵 178

武家政治の時代 179

あとがき

186

装幀 芦澤泰偉
イラスト 高須賀優
編集協力 辻由美子

第 1 章

野草に聴かせる歌

人生の最高の楽しみ

私がバードウォッチングに興味を持ちはじめたのは、高校生のころからである。エドワード・グレイがハーバード大学で行った講演について小泉信三さんが書かれたものを読んだのがきっかけだった。

グレイは一九〇五年十二月から一九一六年十二月まで、十一年間イギリスの外務大臣を務めたが、第一次大戦の最中、激職の身で休養もかなわず、やがて失明してしまうという悲劇の人でもあった。その彼がまだ外務大臣在職中、アメリカの大統領だったルーズベルトがイギリスを訪問する。

季節は六月。イギリスでもっとも自然の美しいときである。かねて大統領の職を辞したら、アフリカを旅行し、その帰途、イギリスに立ち寄って、探鳥をしたいと言っていたルーズベルトは、そのことをワシントン駐在のイギリス大使に伝えた。

それを伝え聞いたグレイは、自らそのガイド役をかって出る。六月のある日、小さな停車場で落ち合い、護衛や新聞記者の同行も断つて、それから二十時間ばかり、二人は世界から姿を消す。その間、彼らは森の中を歩きまわって、四十種類以上の鳥を見、二十種類以上の鳥の声を聴いた。グレイはルーズベルトが鳥についての知識が豊富で、その耳がよく訓練されていること、また詩句の引用が適切で、博学なことに感心し、あの多忙な人がいつの間にかこれほどの素養を蓄えたのか、信じられないと語っている。

たとえば、キンカンミソサザイの声を聴いて、すぐにこの鳥は、アメリカとイギリスで唯一共通する鳥である、と言って、鳥に詳しいグレイを驚かせている。

あるいは、ブラックバードの声を聴いて、これがイギリスの鳥の中で、一番美しいと言っているが、後に本を見ると、専門家も同じ意見を発表していたという。ルーズベルトは、世間の人たちがツグミの声をほめて、ブラックバードのことをよく言わないのは、きっとブラックバードという名で損をしているのではないか

とも言っている。

二人が歩いた森はティッチボーンという八百年来の古い教会のある小さな村の付近で、二人はその間、ワーズワースを語り、テニスを朗誦し、小さな旅籠に泊まって、翌朝、グレイは近くの港までルーズベルトを送っていく。グレイはルーズベルトの人を鼓舞する人格をたたえ、

「人生の中で、自然の美しさに対する感覚と愛とにまさる喜びはない。もし我々が、自然の美をワーズワースが感じたように感じとることができるならば、我々は自らのうちに真に大いなる力と爽快と確信とを持ち得るであろう」と語っている。

阿蘇の四季彩

私も森や山を歩くのは何よりも好きだ。子どものころから親しんだ軽井沢あの濃い緑と空気は、何といっても格別だが、私は阿蘇の雄大な陰影も好きだ。阿

蘇には四季おりおりの草花が咲き乱れる。四月になると、かぶと岩のあたりに、まずキシミレが咲き、大観峰にはハルリンドウが頭をもたげ、九州ではここにしか咲かないアズマイチゲが可憐な花を開く。

五月になると、ゼンマイ、ワラビ、ウド、コゴミ、タラの芽といった山の珍味に加えて、サクラソウやカタクリ、リュウキンカが咲き、六月も終わりに近くなると、阿蘇にしかないハナシノブやツクシマツモトなどが人々を魅きつける。

そのハナシノブをしのんで、毎年六月の最後の日曜日、高森の野草園のクヌギ林の中で、ハナシノブのコンサートが開かれる。女子高校生がマンドリンだけで構成するコンサートだが、この催しが変わっているのは、人に聴かせるコンサートではなく、野の花に聴かせるコンサートだということだ。「ハナシノブ組曲」の優雅な調べにつられて、カッコウやホオジロも合奏に加わる。

宣伝もしていないのに、毎年各地からたくさんの人が集まって来る。私が楽しみにしている年中行事のひとつだ。

その六月がすぎ、夏に入ると今度はヒメユリやノハナショウブ、ユウスゲがきれいな季節になる。ユウスゲというのは、橙色のユリに似た花で、それが群生しているところがある。

夕方の五時ごろから七時ごろまでしか咲かないから、その時間帯に行かないと見られない。熊本からだいたい四十―五十分で行ける距離なので、天気の良い日は、お弁当を持って、ふらりとユウスゲを見に行ったりする。

それを見て、夕風に吹かれて帰ってくるのが、私の一番好きな夏の夕刻の過ごし方である。そして、盂蘭盆のころになると、ヤツシロソウやガマ、ノヒメユリ、ヒゴタイなどがいつせいに咲き、見渡す限りのススキの波が月の光に揺れる十月から十一月にかけてシオン、ウメバチソウ、リンドウが続き、わらこずみがあちこちに積まれるころになると、冬もすぐそこまでやってきている。

ブレイン・ファーマー

最近、私の友人でも、時間を見つけては、自然にふれようとする人たちが増えてきた。私も阿蘇にささやかな土地を借りて、お百姓さんの真似事を始めている。もっとも、私のはブレイン・ファーマー、つまり理論派百姓で、理屈ばかり言っている「あご百姓」だが……。「おまえさんは命令ばかりしているからだめだ」と、近くの農家の青年たちに言われっぱなしである。

このあたりはサルが多く、せっかくできた作物もサルに食べられてしまうことが多い。しかし、私のささやかな畑には秋大根やナス、キュウリ、トマトが植えられている。

そうこうするうちに、一緒にお百姓さんの真似事をしたいという仲間が増えてきて、現在十二、三人の百姓願望グループになってしまった。

メンバーには、ソフトウェア技術者あり、研究機関の研究員あり、種々雑多な

人たちが、みんな私の借りている近くに畑を借りて、農作業をしたいと言い出している。まだ満足に野菜も作れないのに、早くも「オレはフォアグラをやりたい」「農協長はだれがやるのか」と一人前のことを言い合い、賑やかなことである。

土と共に生きる新しいライフスタイルを新田園主義、ネオ・ルーラリズムと言ったりするが、ともかく、自然の中で、自由な、創造的な生き方をしたいと考える人たちは、今後、ますます増えてくるだろう。

軽井沢山荘

私は高校生のころまで、毎年軽井沢の山荘で夏を過ごした。この山荘は、大正五年頃に祖父が建てたものだが、その当時、周囲には徳川家や前田家などのほか、ほとんど別荘らしい別荘もなかったという。三笠に至るこのあたり一帯は、今こそモミの大樹などが茂って苔むしているが、その当時は大きな樹々もなく、関東大震災の時には、わが家の庭からも東京の焦げた空の明るさが望まれたという。

